

「江戸名所図会を楽しむ」

2015年11月22日 水谷 剛

1. はじめに

「江戸名所図会」は、江戸時代 265 年後半の寛政から文化・文政にかけ神田の名主、斎藤家祖父・親子 3 代が 35 年かけて完成出版した 7 巻 20 冊の江戸の町と近郊に関する一級地誌資料です。当時の世界最大都市・大江戸の「観光名所案内」を超えて貴重な「文化風俗資料」でもあります。著者は古今東西の文献を読んで自在に引用しながら名所や寺院仏閣の由来・祭礼風俗・土地の名前由来などを詳細に記述しています。また、長谷川雪旦の見事な図会は、記事の内容をさらにビジュアル化して補い、あたかもそこにいるかのように臨場感のある絵で魅力を倍加しています。

「江戸名所図会」の楽しみ方として「極意へのステップ」、初級・中級・上級の 3 段階を別紙で示しましたが、本日参加の皆様はどの段階でしょうか？（資料参照）

編集者兼著者、斎藤月岑（幸成）の「附言」（まえがき）を紹介してから開始とします。江戸文語調を現代語で置き換えてみました。

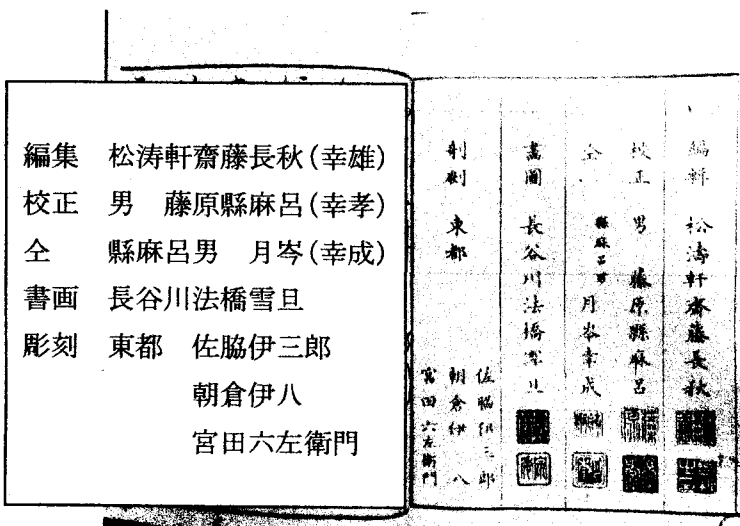
●「この書は、祖父が寛政の頃編んで、父がそれを補ったのが文化時代末であった。文政の今になって出版できた。30 有余年が経過し、江戸が隆盛となるに従い、神社や寺の境界も時間の経過で変化することが多い。全くの小さい祠（ほこら）も僅かな時間で壮麗な大社になったり、小さい庵（いおり）も荘厳な邸宅となっていたりすることも少なくない。あるいは、立派な門構えや回廊のある邸宅も消失し、基礎の石のみになってしまう興廃の事例の枚挙にいとまがない。とはいえ、時々現状に合わせて改訂しようと思ってもなかなかできない。このため、いまの眼でみると現状と異なっていることが多い。読者諸兄には、事情を察して不審に思わないで欲しい。」

●この「附言」への水谷コメント

月岑は祖父の出版準備した原稿の記述以来、30 有余年という時間経過による変化を取り入れて最新の記事としたいが、名主としての多忙な仕事も有り、なかなか実行できないもどかしさがある。加えて、祖父幸雄の企画を顕彰するため、寛政時代の状態を尊重したい考えもあり、あえて変更していない面もある。現代の我々には、その後関東大震災や戦争空襲の二度の大火災もあり、この時代の名所の面影を見出すことが難しいからこそ、「江戸名所図会」を片手に推理的に残影さがしをする楽しみがある。

2. 江戸名所図会の成り立ち

- ・家康の江戸入り直後に築いた下町（町人の住居地で古町と言う地域）の内神田雉子町で代々「名主」を務めた斎藤幸雄、幸孝、幸成が親子三代にわたって、編集した江戸と郊外の案内である。
- ・祖父幸雄は、寛政 10 年（1798）に幕府から出版の許可を得たが、翌年に亡くなり、



父幸孝も江戸近郊に自ら絵師：長谷川雪旦とともに取材の旅を重ねて、特に各地の寺社の縁起を精力的に研究し、古老の話を聴いたりしている。もう一步というときに他界する。15歳で名主を継いだ月岑は、多忙な名主業の傍ら勉学に励み、15年かけて文政10年（1830）ごろに編集を終えて、天保5年（1834）年明けから三巻十冊、翌々年に残りの四巻十冊を出版し、2ヶ月ほどで完売するほどの評判を呼んだ。祖父の死から出版まで35年の大事業といえる。

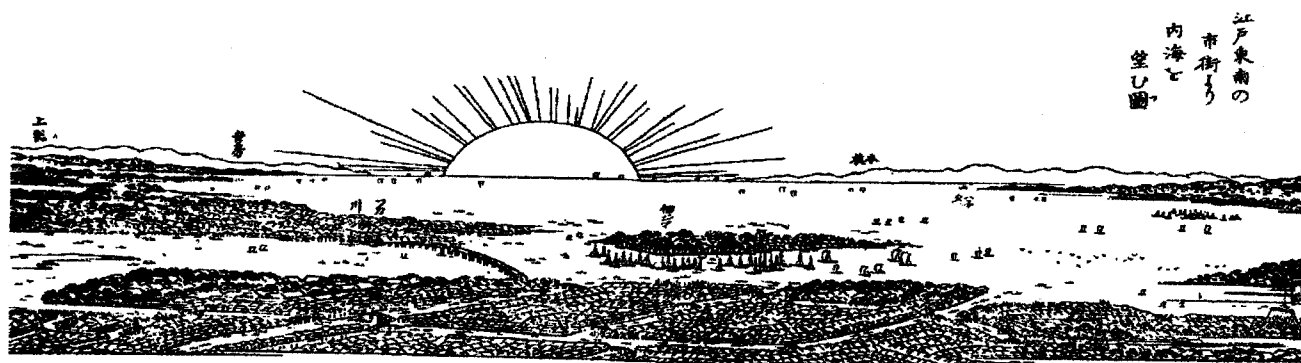
- ・月岑は、文化、文政時代にかけて祖父・父2代の原稿整理や最終点検、校正など編集一切のことをしている。祖父の「寛政」時代を強調するため、それ以後の「享和・文化・文政・天保」の年号は一切出てこない。つまり、「江戸名所図会」の企画者たる祖父幸雄の顕彰の気持ちを汲み取れる。
- ・全7巻20冊の『江戸名所図会』には1043件の名所が収録され、江戸近郊（南は金沢八景、西は多摩川登戸、向ヶ丘枳形山、武蔵小杉、北は大宮、東は船橋まで）が網羅されている。
- ・素晴らしいのは長谷川雪旦の挿絵である。現地に出かけ詳細を丁寧に描いている。740枚の名所（景勝地、神社仏閣、年中行事、盛り場など）から興味深い図会を順次紹介する。

3. 江戸城が登場しないのは何故？ ～鯨形蕙斎の「江戸一目図屏風」との比較～

江戸最初の図は、日本橋あたりの上空から大川（隅田川）越しに江戸湾から昇る朝日と江戸の町を眺望している。江戸の町を上空から描いた絵図に、津山郷土博物館所蔵の「江戸一目図屏風」がある。遠景の富士山のすぐ下に江戸城が描かれ、重要な位置を占める。鯨形蕙斎は、津山藩のお抱え絵師として、反映する江戸の全体像として江戸城を中心（主役）に俯瞰図を書いている。：文化6年（1809）

一方、江戸名所図会では、意識的に江戸城の方向を外して避けている。この傾向は「江戸名所図会」全体を通しての考え方を表している。つまり、全20巻を通して江戸城の絵図は1枚も存在しない。（「駿河町三井呉服店」図の遠景に小さく江戸城郭望楼が見えるのが唯一のもの）

幕府は、享保7年（1722）に江戸城を印刷物に取り上げることを制限する触れを出したが、10年後



の刊行「江戸砂子」では、かなり江戸城を描写しており、この程度であれば描写することもできた。然し月岑は、積極的に江戸城の描写を控えている。理由としては、家康以来の「古町名主」として、町人のリーダー役であったので思想的にも町人に寄り添った形で通したかったのではないかと推定される。

4. 大名の「江戸城登城や寺社参詣」は大迷惑？

「元旦諸侯登場の図」では、2組の大名が城中での「將軍家年始の儀式」に参加するため江戸城に向かう行列を描いている。大名屋敷の荘厳な門構えは、1657年の明暦大火で大部分は灰燼に帰している。江戸在住の大名は、毎年正月は大忙しとなる。

- 元旦～3日：●「江戸城に御一門方並びに御譜代大名諸御役人御礼」
- 10日：●「上野寛永寺御成、諸大名装束御参詣」
- 17日：●「江戸城紅葉山東照宮参詣」（御三家は將軍が家康命日で参詣するときに随行）
：●「上野寛永寺、諸大名参詣」
- 24日：●「増上寺御成、諸大名御参詣」

新年挨拶以外に正月に3回、年間11回の寺院参詣を強制された。その都度、家格に応じた供揃えで長時間の移動や待機等での時間を過ごすことになる。大名一同のみでなく、この参詣時の道筋では、江戸の一般町民は火気厳禁のため食事準備の煮炊きもできないばかりか、通行遮断など大迷惑であった。

5. 江戸の町「ガードマン」の仕事とアルバイト（木戸と自身番）

1) 木戸と木戸番

江戸の町は閉鎖的で、至る所に（町の境）に木戸を巡らせ、夜間は一切の通行を遮断した。（お上の御用は除く）それでも「四つ時」（22時）までは顔見知りであれば、木戸のくぐりを開けて通行させたが、そのときは、木戸番に「心付け」を渡す必要があった。



この木戸番は、町が雇い、この木戸番屋に住み、昼間は駄菓子や荒物などを売っていた。昭和の時代まであった「横丁の“何でもや”のお店」という風情であった。

また、「四谷大木戸」の絵図では、堂々と“下肥”を馬で運ぶ様子を描いている。元禄時代1691年と1692年に2回長崎出島から江戸までの参府旅行をしたドイツ人ケンペルは、この“におい”には辟易である・・と記述している。

2) 自身番(番所)

現在でいえば、区役所の出張所兼交番といった役割の都市行政の出先機関であった。「自身」の意味は、その町の運営に「責任を負う」地主町人たちが交代で詰めて勤務した事務所である。地主町人は家主という「町役人」に事務を委託した。

6. 神社・仏閣は「一大プレイ・ゾーン(遊行場所)」

江戸名所図会の記述項目は全部で1043件あるが、過半数を神社・仏閣で占めている。この多さは、当時の江戸住民にとって最大の関心の場所であったと言える。もちろん、宗教としての信仰心から参詣することもあるが、それ以上にその場所が、楽しい「娯楽や遊行」場所であった。寺も多くの人をひきつけ収入を確保するための施策として推進していた。代表的事例を紹介する。

- 1) 回向院(出開帳や相撲の場で有名) 2) 浅草寺(広い境内で見世物興行)

* 大衆芸能の世界

● 両国広小路や浅草寺境内の広場での見世物

曲馬、茶屋、講釈、浄瑠璃、ものまね、土弓、かるわざ、あわもち、茶屋、大道芸、

● 松井源水の曲独楽

大道芸人、香具師(やし)。昭和期までに17代を数える。延宝・天和(1673-84)のころに、4代目玄水が江戸へ出て反魂丹を売りはじめ、その宣伝のために、箱枕をいろいろと扱う曲芸(枕返し)や居合抜きなどを演じた。享保(1716-36)ごろには、居合抜きのほか曲独楽(きよくごま)(独楽)を演ずるようになり、将軍家重の浅草寺参詣のおりには上覧に供した。

7. 多摩川風景 今昔を見る

都立中央図書館に斎藤幸孝が甲州街道から多摩川近辺を取材散策したときの自筆歩行記録図面が保存されている。幸孝が実地踏査をした地域：東は布田宿、西は日野宿、南は多摩川があって、さらに「此の山続き、すべて向ヶ丘と云う」とある。この踏査時に長谷川雪旦が描いた図を順次みていく。

① 清水の立場(巻之三)

・甲州街道の途中、府中宿と日野宿での休息場所である「たてば」の図では、清泉が湧出する井戸のある店先では、炎暑を旅してきた二人連れが、上半身裸で冷たい素麺を食べておかわりの催促をして涼んでいる。冷たい西瓜も用意しているようだ。二人の巡礼?も早くこの素麺を頂こうと足取りも急いでいる表情がわかる。藤棚の下を涼しい風が吹きぬけ、茅葺の家の屋根にのんびりと鶏が天下を眺めていたり、のんびりとした時間が止まったような風景である。

② 日野の津(巻之三)

・立川(柴崎村)から多摩川を渡り、日野の津「渡し場」の様子である。

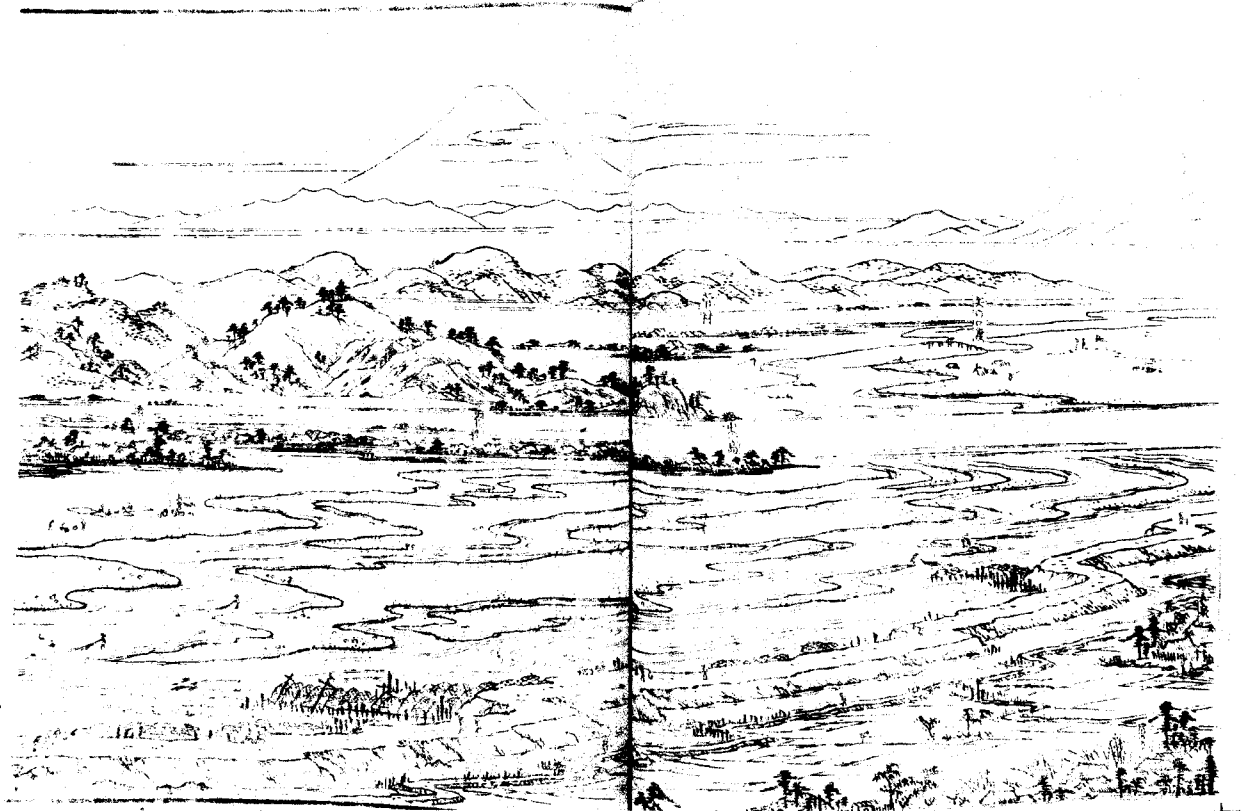
興味深いのは、苫屋の壁にある「JALマーク」や「江戸一」の文字であるが、酒樽の薦(こも)を

雨風よけに使っている。中では旅人が煙草を吸ったり、休んでいる傍らでは、男が火を起こして多摩川名物の鮎を焼こうとしている。ところで、5代将軍綱吉が「生類憐みの令」は有名であるが、「鶴の字禁止令」について庶民が困った話がある。

③ 多摩川の鮎（巻之三）

- 江戸時代には「多摩川鮎」が「御用鮎」として幕府に上納されていた。明治以降、二子や登戸がアユの名所となった。二子の船宿「亀屋」は1875年(明治8年)から12回にわたって皇族方の御休憩所になり、大正天皇や昭和天皇も皇太子時代にアユ漁に来た。このアユは中流域では掴み取りできるほど多かったとも伝えられている。魚類のほか、その魚類を捕食する鳥類も多く生活していたとの記録がある。文献には、多摩川流域にもトキ、コウノトリ、ツル類、ガンカモ、オオハクチョウなどが訪れていたとも記録されている。最近登戸多摩川近辺でシラサギやアオサギが多く見られるようになった。

④ 多摩川の図（巻之三）



- 多摩川の東京側から眺めた図で、今の小田急鉄橋あたりの景色で、かつては登戸の渡しがあった。当時の護岸の工法や川の渡り方が精密に描かれている。砂利の川床は杭が打てないので竹かごに石を詰めて固定し、水の勢いを停めて土手の保護をしている。登戸の渡しは夏は渡船、冬は仮橋が作られた。文説明では、「雨後には、渡り口移転して定まることなし」

「日野の津より以西は、水石の美、奇絶もつとも多し。以東は、平地といへども長流の経るところ往々観を改め、また勝景なきにあらず。鮎をもってこの川の名産とす。ゆえに、初夏の頃より晩秋の頃まで、都下の人遠きを厭わずしてここに来たり、遊獵せり。」とある。

8. 江戸後期出版の名所案内（紀行記）

「江戸名所図会」を筆頭に、多くの名所図会や紀行文が幕末期に出版された。

●都名所図会・東海道名所図会・以下名所図会を省略

西国三十三所・木曾路・摂津・大和・河内・和泉・伊勢路・播磨・住吉・須磨・明石・紀伊・尾張・近江・伊勢参宮・京都熊野・金比羅詣・成田

●案内書：筑波山・鎌倉・江ノ島・鹿島・香取 ●紀行文：嘉陵紀行 ●滑稽本：東海道中膝栗毛

9. 武士のお江戸郊外散策記録と名所図会記述の比較

『嘉陵紀行』という古文書が特別研究室にある。文化4年（1807）から天保5年（1834）にかけて、徳川清水家に仕える武士が江戸近郊の寺社を訪ねたその様子を記述した本です。

原本は国立国会図書館に保存されている。作者は・村尾正靖（号は嘉陵）、全20巻。

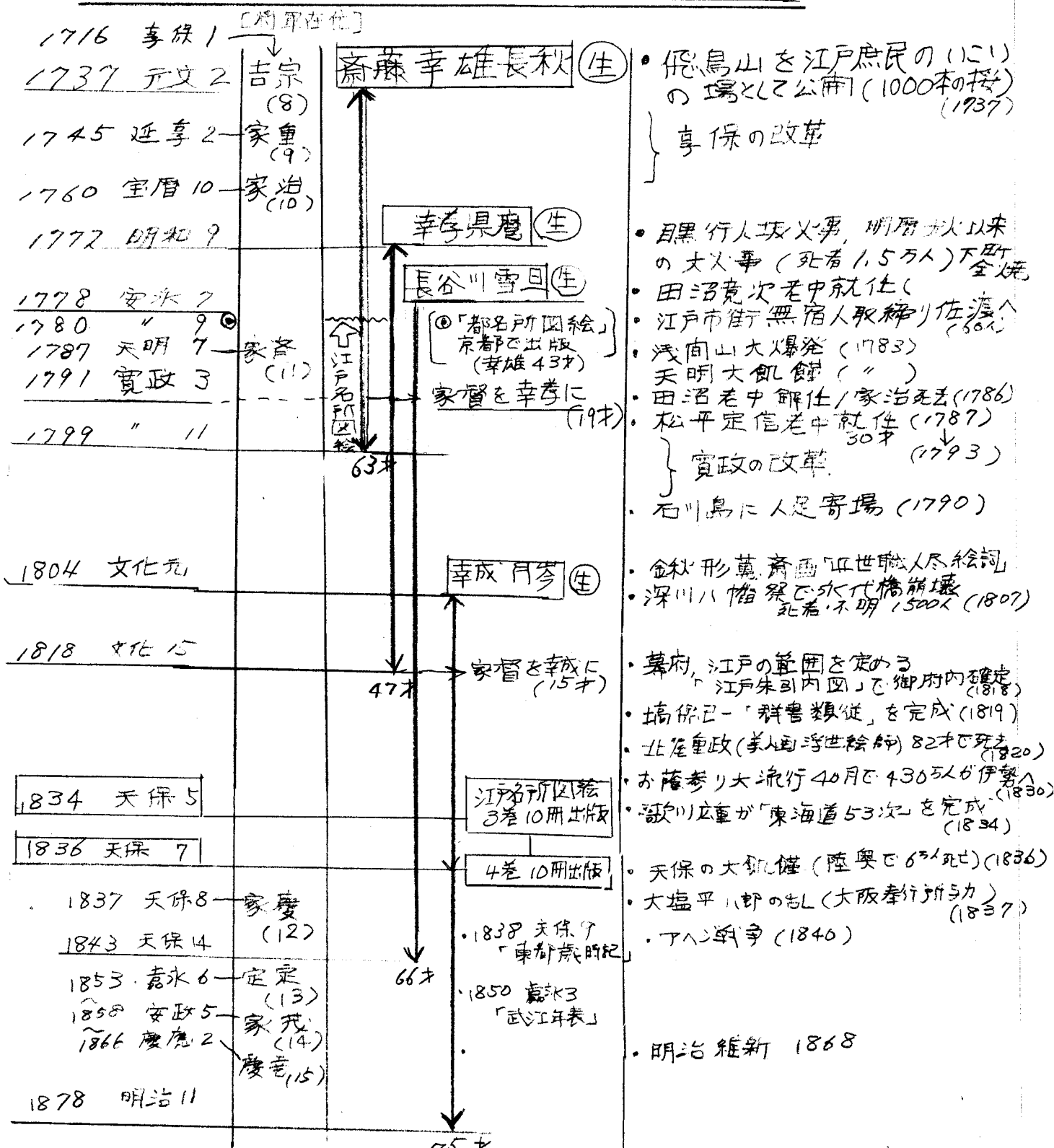
同時代と思われる斎藤幸孝と村尾正靖の眼で見た同じ場所（井の頭池）の記述内容を比較してみた。

	嘉陵紀行（井の頭弁才天詣の記）	江戸名所図会（井頭の池）
紀行の日付	文化13（1816）9月15日	不明
徒歩ルート	浜町賜舎（市谷）～尾張屋敷～自性院～三光院～中野～堀の内妙法寺～大宮八幡～下高井戸～上高井戸～久我山村～玉川上水	不明
池の大きさ	さまで大ならず上野不忍池の半ば	長さは三百歩、幅は百歩
徳川家康逸話	東照宮この池にならせられ、名水たるをもって、江戸まで引かせられ、永く水源のかれざらん事を思召され、慈眼大師に仰せ有て水加持修せしめ賜う。	大神君たまたまここに至らせたまひ、池水清冷にして味はいの甘美なるを賞揚したまひ、御茶ノ水に汲ませらる。
徳川家光逸話	この水江戸数万人の咽喉をうるほす。これ江戸中の井の頭也と、上意ありしより、この池の名と成、楊枝を挿させ賜ふが根をおろして大木と成、今現に社の東側池の岸に有。	深くこの池水を愛せられ、大城の御許に引かせらるべき旨欽命ありて、御手自池の傍らなる辛夷の樹に御小柄をもて、「井頭」と彫りつけたまふ。これより後、この池の名とす。

● 参考文献

- *江戸名所図会 天保5年版 7巻全20冊 特別研究室 蔵書
- *江戸叢書 江戸叢書刊行会 巻の壱【編集】『嘉陵紀行』（村尾正靖）特別研究室 蔵書
- *神田橋御番所絵図面 32枚（享和2年写 神田橋御番所の取扱事例 特別研究室 蔵書
- *江戸城出火節登城色分図 特別研究室 蔵書
- ・新訂江戸名所図会1～6冊と別冊1～2冊 市古夏生 ちくま学芸文庫
- ・江戸城が消えていく 千葉正樹 吉川弘文館
- ・江戸名所図会でたずねる多摩 重信秀年 けやき出版
- ・江戸の橋 鈴木理生 三省堂
- ・観光都市江戸の登場 安藤優一郎 新潮社
- ・環境都市の真実 根崎光男 講談社α新書 以上

江戸名所図絵の時代背景 (線と面)



- 飛鳥山を江戸庶民の(に)の場として公開(1000本の桜)(1937)
- 享保の改革
- 目黒行人坂火事, 明暦大火以来の大火事(死者1.5万人)下野全焼
- 田沼寛次老中就任
- 江戸市街無宿人取締り佐渡へ(50人)
- 浅間山大爆發(1783)
- 天明大飢饉(")
- 田沼老中解任/家治死去(1786)
- 松平定信老中就任(1787)
- 寛政の改革 (1793)
- 石川島に人足寄場(1790)
- 金秋形萬斎画「世職人尽絵詞」
- 深川ハ幡祭で水代橋崩壊(死者不明1500人)(1807)
- 幕府, 江戸の範囲を定める「江戸朱引内図」で御府内確定(1818)
- 堀保正「群書類従」を完成(1819)
- 北尾重政(美人画浮世絵師)82才で死去(1820)
- お蔭考り大流行40月で430万人が伊勢へ(1830)
- 歌川広重が「東海道53次」を完成(1834)
- 天保の大飢饉(陸奥で6万人死)(1836)
- 大塩平八郎の乱(大阪奉行所力)(1837)
- アヘン戦争(1840)
- 明治維新 1868

(2015. 11. 22 水谷剛 作成)

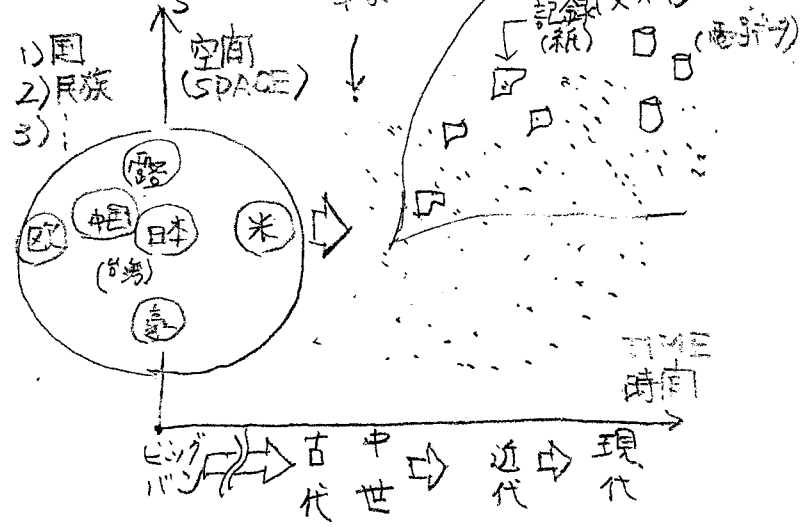
1908 明治40 東京市立 日比谷図書館 南館
1957 昭和32 都立日比谷図書館(現在の建物)

2011. 11. 4 日比谷図書文化館 南館
2011. 11. 8 初回特別研究室 木曜セミナー → 180回実施 2015. 11. 12

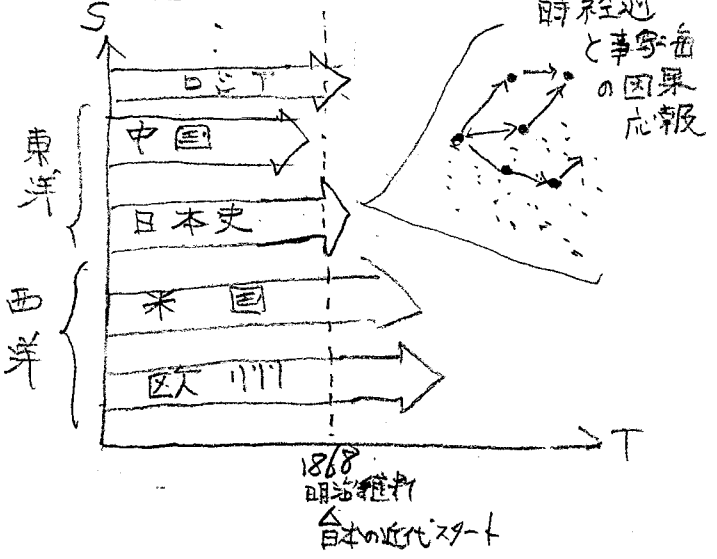
歴史観進化論について

2014.1.29 (木) 水谷記
日比谷特別研究室 MS 配布

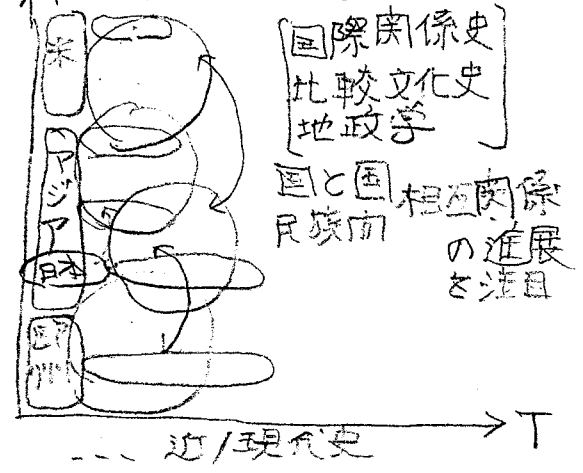
I. 点歴史



II. 線厂史 (年表)

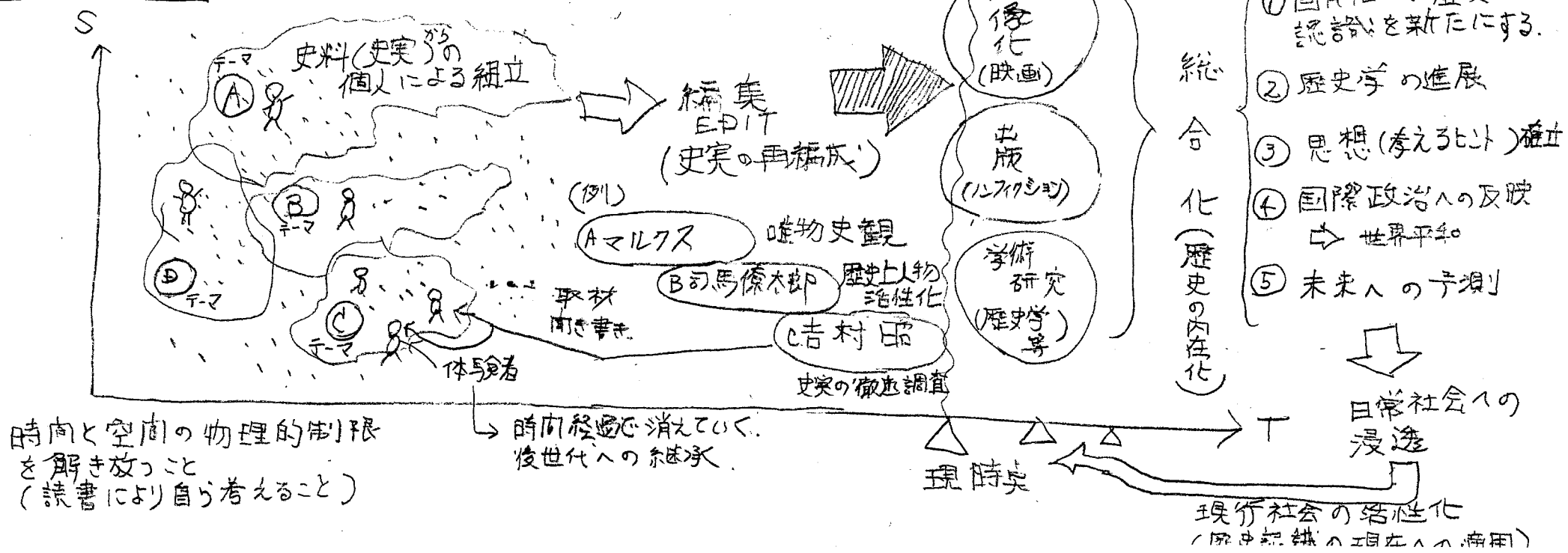


III. 面歴史



IV. 立体歴史 (個人が組み立てる歴史観)

史実の空き向を想像
で埋める。

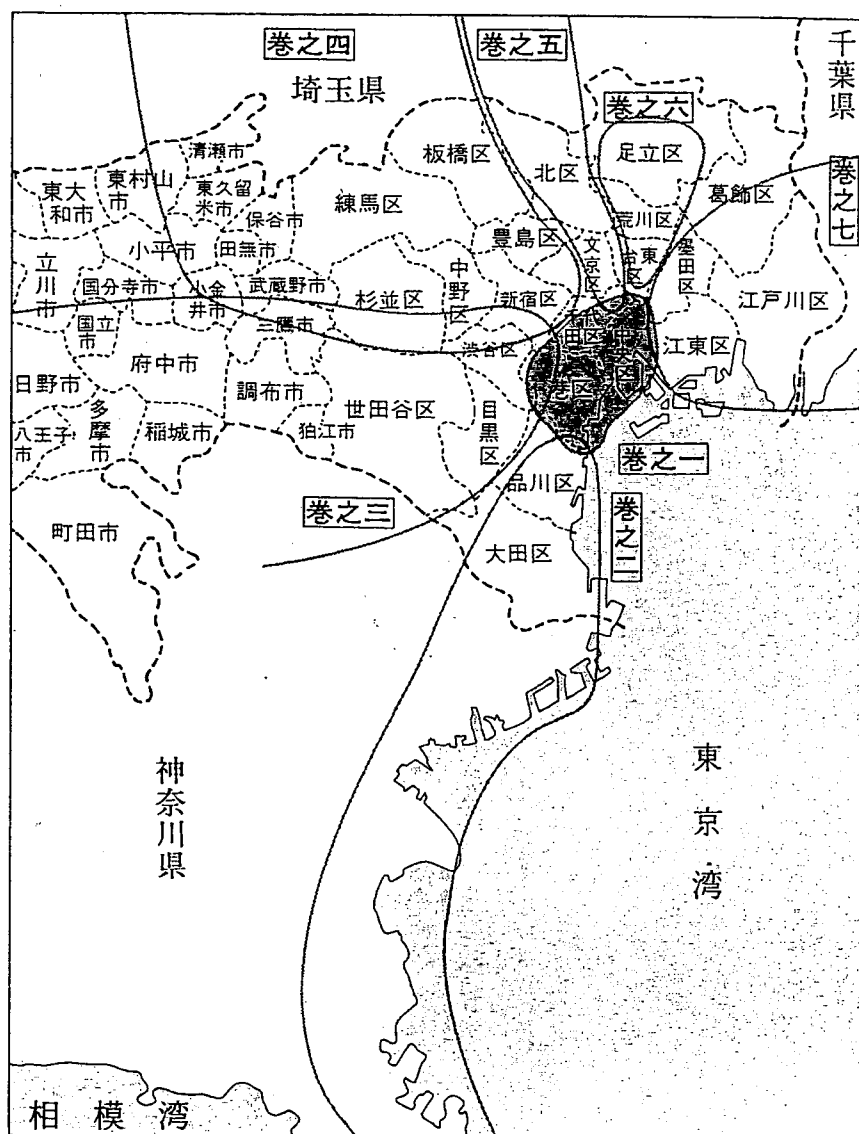


巻と冊数	巻の名称	名所旧跡の採録範囲
巻之一 (三冊)	天枢(てんすう)之部	千代田区、中央区、港区
巻之二 (三冊)	天璇(てんせん)之部	品川区、大田区、神奈川県湾岸部
巻之三 (四冊)	天璣(てんぎ) 之部	渋谷区、目黒区、世田谷区、多摩南部
巻之四 (三冊)	天権(てんけん)之部	豊島区、新宿区、板橋区、中野区、練馬区、杉並区、多摩北部、埼玉県の一部
巻之五 (二冊)	玉衡(ぎょくこう)之部	文京区、北区、埼玉県の一部
巻之六 (二冊)	開陽(かいよう)之部	台東区、荒川区、足立区
巻之七 (三冊)	揺光(ようこう)之部	江東区、墨田区、葛飾区、江戸川区

全七巻二十冊の構成と対象地域 (出典：JTBパブリッシング)

前半 1-3 巻(10 冊)は天保5年(1834)

後半 4-7 巻(10 冊)は天保7年(1836)に刊行された (全7巻20冊)。



『江戸名所図会』全七巻の採録地域

「江戸名所図会」の引用文献一覧

2013. 6. 1 水谷

「新訂 江戸名所図会」ちくま学芸文庫 参照

- ~~~~~
- ・和名類聚抄 源順 10世紀
 - ・和漢三才図会 寺島良安 1712
 - ・詞林采葉 由阿 1366
 - ・神社啓蒙 白井宗因 1670
 - ・続日本紀 797
 - ・拾芥抄 洞院公賢 1341
 - ・古事記
 - ・日本書紀
 - ・万葉集
 - ・丹後風土記
 - ・古今集
 - ・黄葉集 烏丸光広 1669
 - ・水鏡 12世紀
 - ・東鏡
 - ・太平記
 - ・承久記
 - ・延喜式 927
 - ・更級日記 菅原孝標女 11世紀
 - ・夫木和歌抄 藤原長清 1310
 - ・南向亭 酒井忠昌 18世紀中頃
 - ・園太暦 洞院公賢 14世紀
 - ・平安記行
 - ・北国紀行 堯恵法師 1485
 - ・東国紀行 宗牧 1545
 - ・回国雑記 道興 1487
 - ・神鳳抄
 - ・風土記抄
 - ・武蔵国風土記
 - ・武蔵野紀行 北条氏綱 群書類従18巻
 - ・令義解 (りょうぎげ) 834
 - ・訓閲集
 - ・異本源平盛衰記
 - ・甲陽軍鑑 江戸初期

- ・北条家所領役帳 小田原北条家
- ・北条家分限帳 小田原北条家
- ・義経記
- ・あずまめぐり 1643
- ・むさしあぶみ 浅井了意 1661
- ・江戸名所記 浅井了意 1662
- ・東海道名所記 浅井了意 1659
- ・小田原記
- ・東海道駅路鈴 大曾根佐兵衛 1709
- ・鎌倉大草子 室町末
- ・鎌倉紀行 沢庵 1633
- ・新編鎌倉志 河井恒久 1685
- ・江亭記
- ・武蔵志料 山岡俊明 18世紀中頃
- ・小田原記 四郎左衛門
- ・春日山日記
- ・関東古戦録
- ・諸城変遷録
- ・孝範家集
- ・江戸名所咄 (ばなし) 1694
- ・江戸雀 1677
- ・紫の一本 (ひとつ) 戸田茂睡 1683
- ・江戸砂子 菊岡沾涼 1732
- ・事跡合考 柏崎具元 18世紀中頃
- ・金葉集 勅撰集 12世紀
- ・江戸鹿子 藤田理兵衛 1687
- ・江戸総鹿子 立羽不角 1689
- ・江戸雀 1677
- ・そぞろ物語 三浦浄心 1641
- ・北条五代記 三浦浄心 1641
- ・再校江府名跡志 1772
- ・江戸名勝志 藤原之廉 1733
- ・三橋記 1661 (寛文元年)
- ・吾嬬めぐり 1643
- ・風羅袖日記 素綾 1799
- ・類柑子 (るいこうじ) 其角 1707

- ・年山紀聞 1558
- ・和漢年契 浅野高藏 1797
- ・武徳編年集成 木村高敦 1740-
- ・神社仏閣の由来記
三崎稻荷、三縁山歴代系譜、
- 東海和尚年録 宗朝 1649
- ・東海道之記 沢庵和尚 1637
- ・東土産 宗長 1509
- ・浄宗護国篇 観徹 1710
- ・新著聞集 神谷養勇軒 1749
- ・東国高僧伝 高泉性淳 1688
- ・法華靈場記 豊臣義俊 1686
- ・卯花園漫録 石上宣統 1809
- ・寛永江戸絵図 1634 (寛永11)
- ・寛文江戸絵図 1661-1673
- ・江戸絵図 1680 (延宝8)
- ・江原武官鑑 佐々木氏郷 1656
- ・民間省要 田中丘隅 1721
- ・水鳥記 1667
- ・梅松論 1349
- ・新編鎌倉志 河井恒久 1685
- ・靈驗集
- ・東野遺稿 安藤東野 1749
- ・丙辰紀行 林羅山 1616
- ・兼好家集

「江戸名所図会」を楽しむ 極意

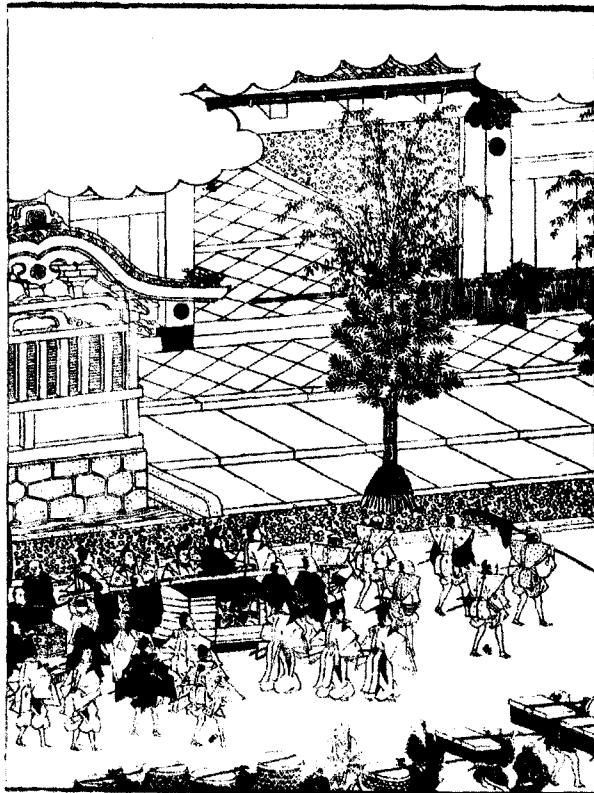
2015. 11. 22 水谷

	初 級	中 級	上 級
文	<ul style="list-style-type: none"> ・なじみのある良く知っている箇所を目次から探す。 ・その場所の説明文をじっくりと読む ・年号と西暦の換算表や歴代天皇一覧表を用意、 ・多数説明のある神社、仏閣が現在も存在しているかを現代地図で確認し、実際に行ってみる。 ・歴史上の戦い、事件に登場する人物を鎌倉、室町時代にさかのぼって歴史事典等で調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・巻之一：天枢之部から巻之七：揺光之部まで通読する。 ・寺院、神社などの由来の歴史的背景を探る。祭礼や仏事、出開帳の実態調査。 ・俳句や和歌の作者と土地の関係を探る。未知の歌人、俳人は人物事典で調査。 ・地名の由来を歴史事実として調査。 ・明治10年刊「東京名勝図会」と現代の比較。 	<ul style="list-style-type: none"> ・月峯（幸成）の他著書や日記を読み、名所図会の執筆背景など研究。（武江年表など） ・月峯が引用している文献の調査（引用箇所の確認と全体の関係を読み解く） ・橋や広場、民家、祭礼などの共通テーマで時代別に比較検討調査。 ・江戸庶民の信仰実態を調査 ・「嘉陵紀行」等江戸時代の他の紀行書と比較
図会	<ul style="list-style-type: none"> ・興味のある絵図を決めてじっくりと細かな描写まで眺める。 ・人物の表情、髪形、着物、持ち物など事物中心に見る。（風俗） ・店、建物、道路の状況など（都市施設） ・商店での商品販売、陳列方法など ・生産現場としての図会（アサクサノリや白酒、木炭、川口の鋳物など） 	<ul style="list-style-type: none"> ・風俗の観点から人物の着物、持ち物、道具、などを通して風俗の歴史を調査 ・商店の販売内容や看板や旗などの使い方 ・商品陳列のものを推理し、販売手法と関連付け。 ・神社仏閣の祭礼における人出の状況 ・他の「浮世絵」等と比較（特に安藤広重） ・自身番や木戸など都市の警備システム。 ・樹木、植木、盆栽や各種植物の名前など調査。 	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代の他の絵図比較 「熙代勝覧」「江戸一目図屏風」 「江戸図屏風」「江戸名所図屏風」 「江戸天下祭図屏風」等と比較。 ・長谷川雪旦の人物研究 ・長谷川雪旦の他の絵図比較（東都歳時記など） ・江戸一目図屏風との細部比較 ・寺社の建築物配置や植栽の特色など
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・天保・文化・文政時代の切り絵図を準備して、寛永時代や逆に明治初めの時代と比較する。（特別研究室に多くの近代地図資料あり） ・気に入った場所を選んで実地調査（現在の状況と比較してどのように変わったかを調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・『江戸名所図会』完成の天保時代から最近までの名所スポットで起きた時間的推移を踏まえた地誌情報変化の調査 ・碑や額などの文章の由来 ・江戸勤番武士や引退大名などの紀行文を読む 	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代以前の歴史記述との整合性を検討 ・拾遺江戸名所図会が出版されたらどういう内容となったかを考察。 ・草創名主と斎藤ファミリーのルーツ調査 ・「都名所図会」で東西の大都市の地誌学的考察。



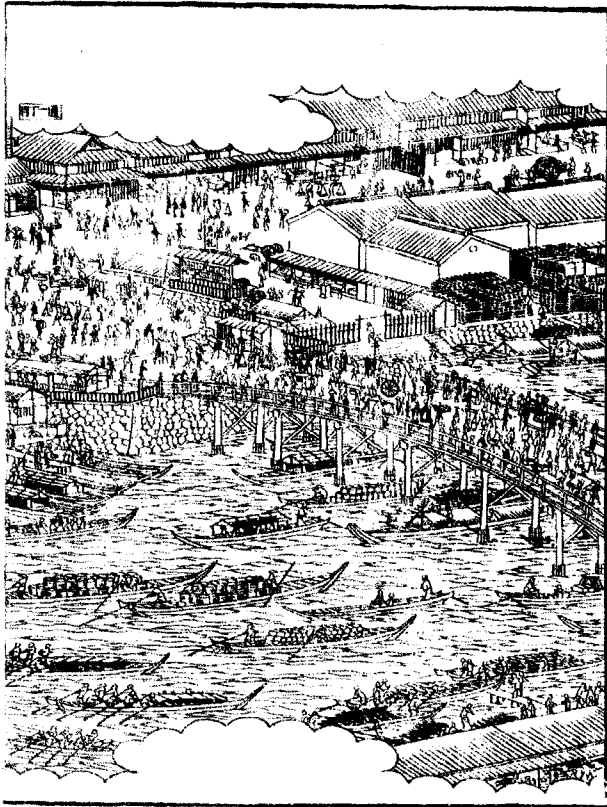
日本武尊東夷征伐の
時、武具を秩父岩倉山に
収めたまふ。これ武蔵國号
の源なり。倭健戎にして容猛
征西又伐東。腰間十束の劍
草薙儼威風。春齋子
濃觸ケリ

日本武尊東夷征伐のとき、武具を秩父岩倉山に収めたまふ。これ武蔵國号の源なり。倭健戎にして容猛／西に征きまた東を伐つ／腰間十束の劍／草薙儼威風を儼かす 春齋子



元日諸侯
登城の圖
藤原十景此朝宗
關險何須百二重
四海通有命物漸
中原岳秀有芙蓉
城地日曠かにして晴
邸第の春分けて淑景
從ふ／回望す鬱葱たる
佳氣の裡／車は流水の
ごとく馬は竜のごとし
服元高

元日諸侯登城の圖 藤原の玉座ここに彫宗す／關險何ぞ須のん百二重に／四海道通して濃澤を含み／中原岳秀でて芙蓉あり／城地日曠かにして晴景過かに／邸第の春分けて淑景從ふ／回望す鬱葱たる佳氣の裡／車は流水のごとく馬は竜のごとし 服元高〔服部南郭〕



日本橋
 自是太平無事客
 東國村盡幾山川
 武江城上慶雲靜
 日本橋頭人氣沸
 翠帶紅衣天帝舞
 玉鞭金帶每頻聞
 相如柱上題知何意
 富貴從來元在天
 山崎蘭齋

日本橋 これより太平無事の客／東國行き尽くす幾山川／武江城上慶雲静
 かに／日本橋頭人氣沸るなり／翠帶紅衣つねに絡繹／玉鞭金帶つねに駢闐
 たり／相如柱に題す知りぬ何の意ぞ／富貴從來元天にあり 山崎蘭齋

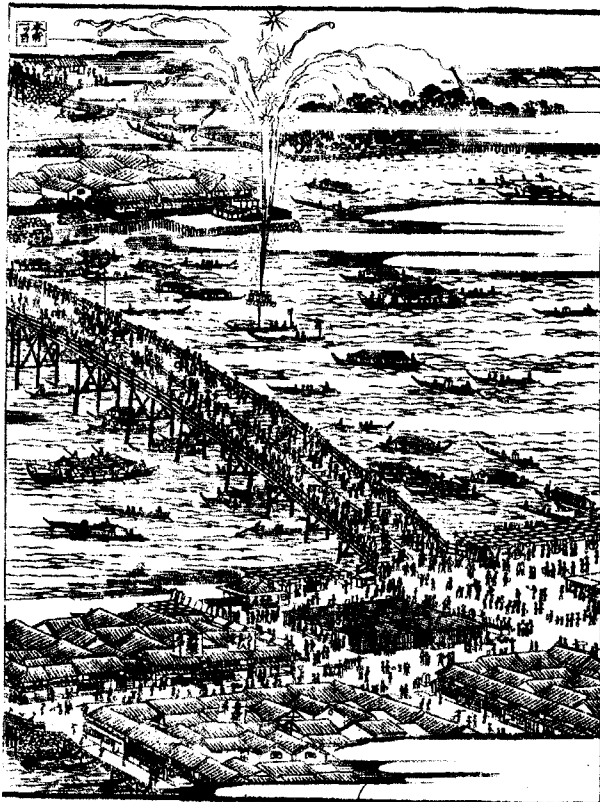
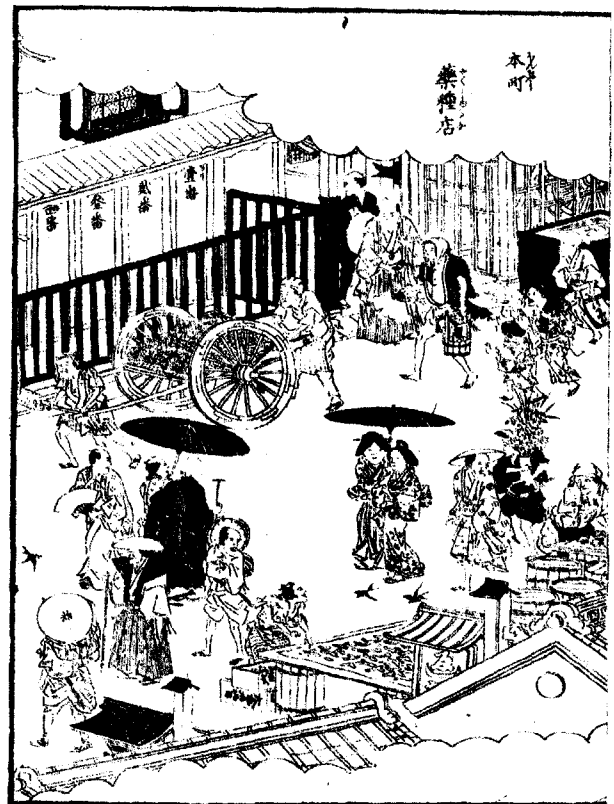


駿河町
 三井呉服店
 えの
 の
 山
 の
 二
 の
 山
 宗鑑

駿河町 三井呉服店 元日のみるものにせん不_レ二の山 宗鑑

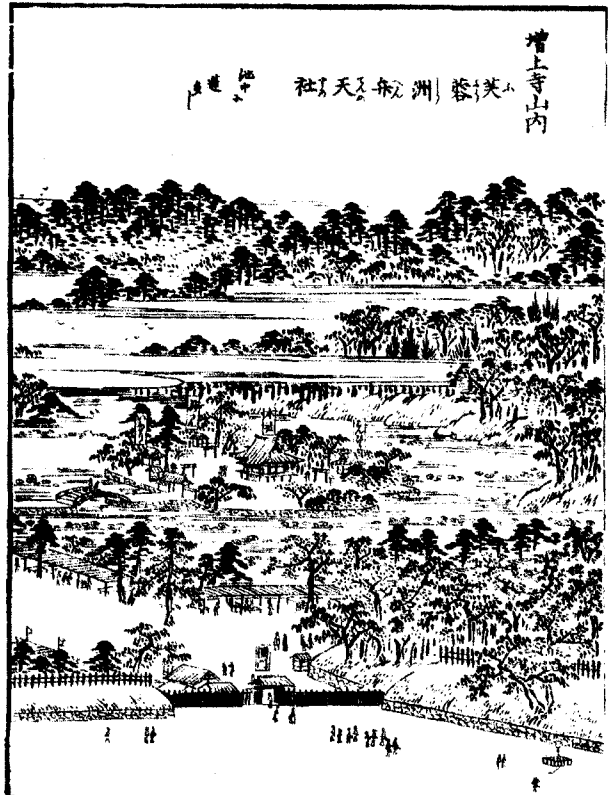


本町 菓種店



河原町

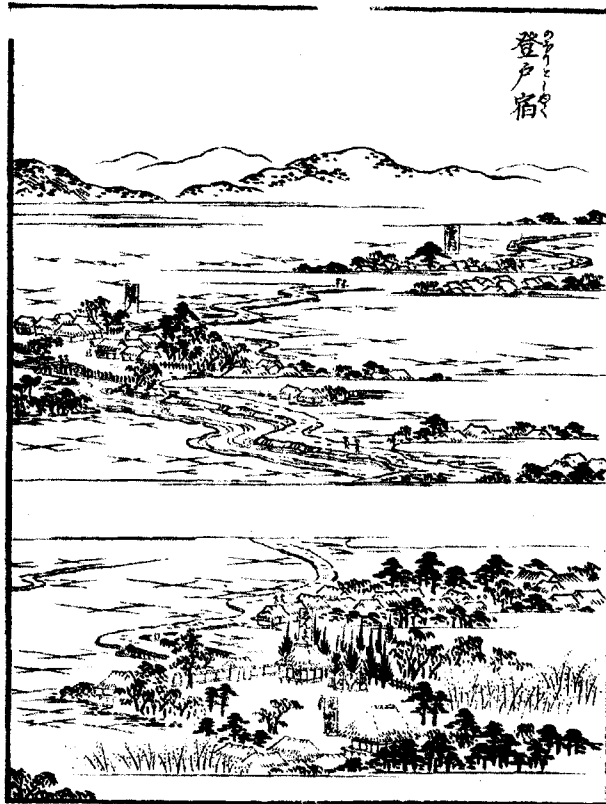
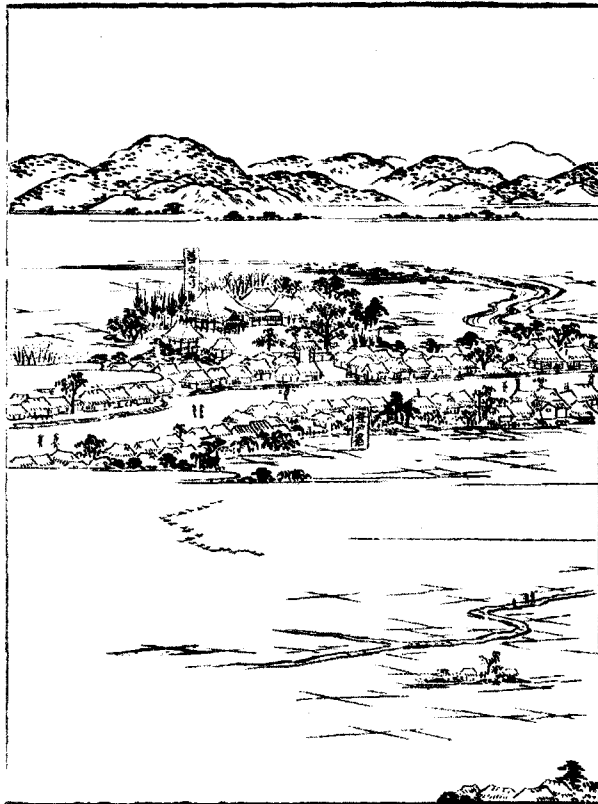




増上寺山内 美春洲弁天の社 池中に蓮多し。



泉岳寺 浅野家の義士等をいたむ おもたかの繪を引くなりかきつばた其角



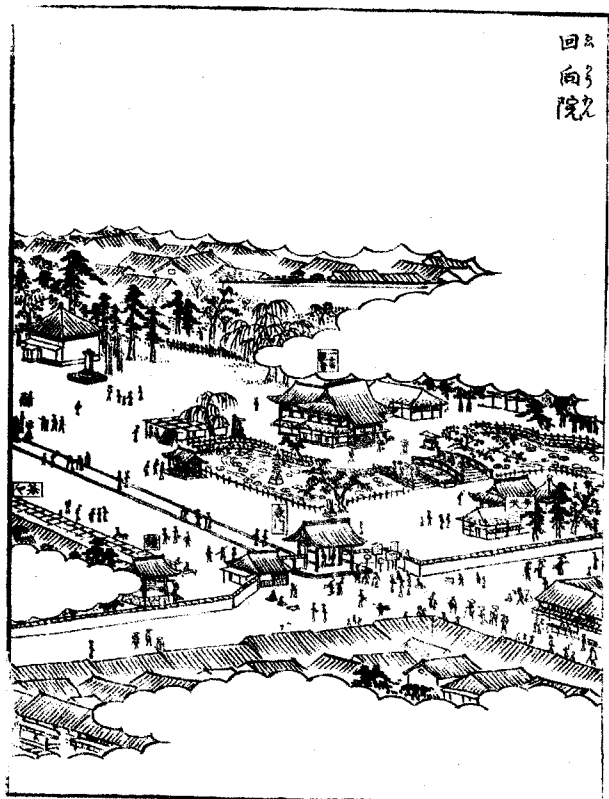
登戸宿



多磨川 六玉川のひとつにて、いま多磨を玉に作る。



玉川たまがわ 瀬せ 玉川瀬たまがわせ 「夫木」おとぎ 祿子内親王家歌合 篝火の影にぞしるき玉川の鮎あやふす
瀬には光そひつ



回向院 廻中の寺を見ず / ただ堀外の鐘を聞く / 江城秋色遠く / 落付高峯
に隠る 白石 (新井白石)

私たちの日本シリーズ 5

開発が続く東京湾沿岸

2007年3月1日 だいち AVNIR-2, PRISM 観測

JAXA



0 2.5km

開発が続く東京湾沿岸

2007年3月1日 だいち AVNIR-2, PRISM 観測

ここは、神奈川県・東京都・千葉県に囲まれた海、東京湾です。画像の右から順に、江戸川、旧江戸川、荒川、隅田川が流れています。隅田川の西側、内陸にある広い緑の部分は皇居（昔の江戸城）で、その南東には浜離宮恩賜庭園があります。南の方の、西から東に流れているのは東京都と神奈川県の境になる多摩川です。

東京湾沿岸をふち取っているように見える角ばった地帯は、近代になってから新たに出現した埋め立て地です。工場や倉庫、火力発電所、下水処理場が並び、都市にすむ人々の生活を支えています。大型船が停泊できる港やコンテナターミナルもあります。多摩川河口の近くに見える、滑走路がある大きな島は羽田空港です。空港の右上の島はゴミ処理場で、その左上にはお台場があります。1980年代以降、お台場には商業施設やオフィスビルが増え、年間4000万人が訪れる観光スポットになりました。

川沿いや、東京湾に面した地域は"ウォーターフロント"と呼ばれ、今でも開発が続いています。浜離宮の東側にある江東区・豊洲のあたりは、以前は工場ばかりの工業地帯でした。現在は、大規模な造船所がなくなった跡地に、マンションや公園、文化施設がたくさん建設されています。それにともない、多くの人々が移住し、新しい街へと変化を遂げようとしているのです。

開発が進む一方で、東京湾の環境にも問題が起こっています。東京湾では赤潮が年におよそ100日間も発生します。家庭や工場から流れてくる排水が原因で、プランクトンが大量発生するのです。海底に沈んだプランクトンの死がいは、分解されるときに水の中の酸素を奪います。すると魚たちが酸欠になり、ときには死んでしまいます。この問題を解決するため、下水道の改善などが行われていますが、生物の生息環境としては依然、あまり好ましいとは言えません。開発とともに、環境をきれいに保つ取り組みも求められているのです。

人工衛星「だいち」とは？

地球観測衛星「だいち」は、2006年1月、種子島宇宙センターから日本のH-IIAロケットで打ち上げられました。

「だいち」は、センサーと呼ばれる3つの目を持ち、重さが約4トン、太陽電池を広げた大きさが約28メートルの、世界最大級の地球観測衛星です。「だいち」は、地面から約700キロメートルの

高さを、南北方向に地球一周約100分の速さで回りながら、私たちの地球を観測しています。

「だいち」の観測したデータは、データ中継衛星「こだま」を通じて地球に伝送され、私たちの暮らす地球の環境や町の様子を鮮明に映し出してくれます。

そのほかにも、地図を作ったり、災害の様子や作物の様子、森林の



様子を観測したり、資源のありかを探するなど、さまざまな方面で「だいち」のデータが活用されています。